

生き残るために必要な『進化』～強いビームは本当に必要？

山田悟史

高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所 中性子科学研究施設

最近読んだビジネス書[1]に興味深い言葉があったので、まずはそれを引用する。

強いから生き残るのではない。適応するから生き残るのだ。

この言葉は、ダーウィンの進化論を意識しています。単純な「強さ」というだけであれば、中生代の恐竜は非常に強い動物でした。しかし、彼らは急激な気候変動などに対応することができず、極めて短い時間で絶滅してしまいました。

一方、ゴキブリは「弱い」動物ではありますが、3億年前から生息しています。とにもかくにもあらゆる環境変化に適応しながら進化し、現代にまで生き残ってきたのです。

(中略)

こうした中、**変化こそが常態**であり、つねに環境変化に合わせて（あるいは先んじて）変化するという愚直に実行できる企業こそがあるべき姿だと見なされるようになってきたのです。

これまで、最先端の実験施設というと「世界最高性能」ということを謳い文句としてきたように思う。しかし、加速器の規模には社会的に許容しうる限界が有り、いつまでもそれを続けることはできない（例えば、ILC よりも大きな加速器は我々が生きている間にはおそらくできないだろう）。また、これから人口減に伴って税収が減少すれば、「世界最高性能」を実現できる加速器の予算獲得はますます難しくなっていく（現時点では、科学技術予算全体で見ると持ちこたえているように見える[2]が、国立大学法人の運交金は激減[3]しており、研究の主体となる教員数の削減は不可避である）。つまり、我々を取り巻く環境は大きく変化しつつあり、先の言葉によると「これに適応できねば衰退は必定」と言える。それでは、現在の環境変化に合わせた物質構造科学研究所の変化とは何だろうか？答えは一つではないだろうし、そもそも組織を維持するための目的に応じてその手段は異なるため、個々人が「自分だったらどうするか」を考える事は無意味ではないだろう。

本講演は「中性子を用いた物質科学の展望」というセッションでの講演であるが、サイエンスの話はおそらくほとんどしない。というのも、発表を引き受ける際、内容について問い合わせた所「サイエンスに関してでも、施設運営の観点でも、もしくは両方でも構わない」という回答であったので、表記のように施設運営に関する発表を行うことにしてしまったためである。概要を書いている今、大それたタイトルにしたことを後悔している所であるが、せっかくの機会なので、しがたい構成員が「どのように変化すれば生き残れるか」という難問について愚考した結果を披露することとする。

参考文献

[1] グロービス著, 嶋田毅執筆, “MBA 100 の基本” (2017) 東洋経済新報社

[2] 内閣府, “科学技術関係予算 平成29年度当初予算案及び平成28年度補正予算について” (2017) <http://www8.cao.go.jp/cstp/budget/h29yosan.pdf>

[3] 文部科学省, “大学改革の検討状況について” (2015)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shinkou/039/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2015/03/12/1355691_6.pdf